

令和5年度出土遺物公開事業

流山新市街地地区の遺跡展

# 大地より出でし 先人の足跡

講演会発表要旨



市野谷入台遺跡出土  
石製模造品（古墳時代）

令和5年9月2日(土)

会場

流山市初石公民館 ホール

【主催】公益財団法人千葉県教育振興財団

【共催】流山市立博物館、八千代市立郷土博物館【協力】木更津市郷土博物館金のすず

【後援】千葉県教育委員会、流山市教育委員会、八千代市教育委員会、木更津市教育委員会

【問い合わせ】公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター ☎043-424-4850 <https://www.echiba.org/bunkazai/>

令和5年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金(地域の特色ある埋蔵文化財活用事業)の交付を受けて実施しています。



令和5年度出土遺物公開事業  
流山新市街地地区の遺跡展  
—大地より出でし先人の足跡—

日 時 令和5年9月2日（土） 13：00～15：00  
会 場 流山市初石公民館 ホール

開催趣旨

流山新市街地地区の発掘調査では、旧石器時代から近世まで数多くの考古学的成果を上げています。その成果は11冊の発掘調査報告書にまとめられており、主な成果は今回の展示会で広く公開しているところです。

今回、展示の内容をさらに深掘りした講演会により、皆さまに考古学の魅力や醍醐味を感じ取っていただけると幸いです。

13：00～13：05 開会挨拶 植野 英夫 公益財団法人千葉県教育振興財団理事長

13：05～13：10 開催館挨拶 秋谷 大和 流山市立博物館長

報 告

13：15～13：45 「流山新市街地地区の古墳時代」  
當眞 嗣史 公益財団法人千葉県教育振興財団

講 演

13：45～15：00 「房総の石製模造品について」  
石井 友菜 千葉県立中央博物館大多喜城分館

# 流山新市街地地区の古墳時代

當眞 嗣史

## はじめに

流山新市街地地区は、つくばエクスプレスと東部アーバンパークライン「流山おおたかの森駅」を中心とした、約275ヘクタールの規模で計画された土地区画整理事業です。事業地内には17遺跡が所在しており、平成9年度から平成30年度にかけて当財団で約74ヘクタール発掘調査を実施しました。その成果を11冊の発掘調査報告書にまとめました。

今回、旧石器時代から近世のなかでも、特に遺構・遺物が多く検出された古墳時代の成果をとりまとめて報告します。

## 1 集落の変遷

### (1) 古墳時代前期の集落 (図1)

古墳時代前期の集落は、市野谷宮尻遺跡では前期のみで竪穴住居跡が90軒、隣接する西初石五丁目遺跡では20軒、市野谷入台遺跡では6軒、総計116軒検出されています。それぞれ同一台地上に位置することから、同一集落と考えられます。前期を特徴付ける器種は高杯と台付甕です。

### (2) 古墳時代中期の集落 (図2)

古墳時代中期の集落は、市野谷入台遺跡で35軒、市野谷向山遺跡で9軒の合計44軒検出しています。いずれも、古墳時代中期前半に収まる時期です。カマドは検出されていません。カマド登場前に集落が終焉しています。

古墳時代前期は、流山新市街地地区の北側に位置する市野谷宮尻遺跡を中心としていますが、中期になると、台地の東側に位置する市野谷入台遺跡と、谷を挟んだ南側の市野谷向山遺跡に移動しています。

古墳時代中期の土器は、古墳時代前期に多様化していた器種の統合化が進み、全般的に画一性の強まる時期です。量的に多いのは高杯で、次いで甕、小型壺(柑)があり、壺・器台・杯・椀・鉢類は少ない。甕は前期で主体となっていた台付甕が減り、平底甕に置き換わります。

### (3) 遠隔地との交流

古墳時代前期は、全国的に地域間交流が活発な時期です。流山新市街地地区もその流れの中にあり、北陸や近江、畿内、尾張、伊勢湾、三河、遠江、駿河といった遠隔地からもたらされたかあるいは影響を受けた外来系土器が多く出土しています。外来系土器の器種は甕・壺・高杯・器台にとどまらず、装飾器台や手焙形土器など祭祀に使用されるような特殊な遺物まで広範囲に及んでいます。このことは、日常使いの土器のみならず、祭祀も受け入れていたことを意味します。

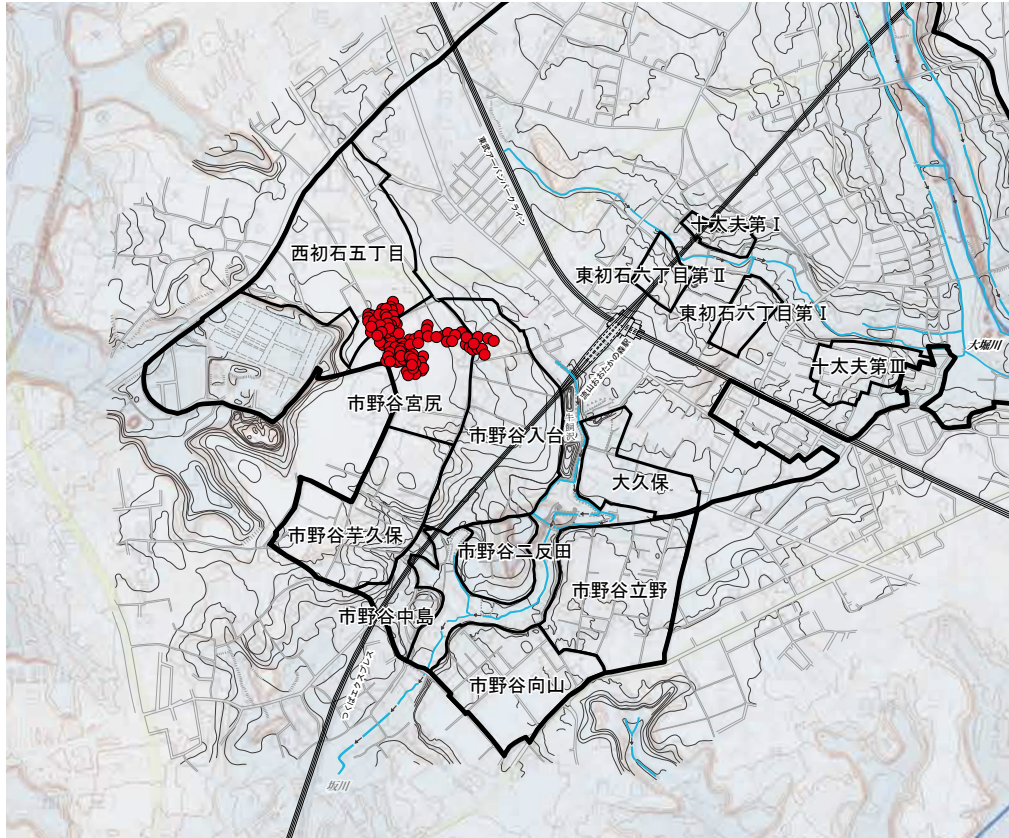


図1 古墳時代前期の住居跡分布

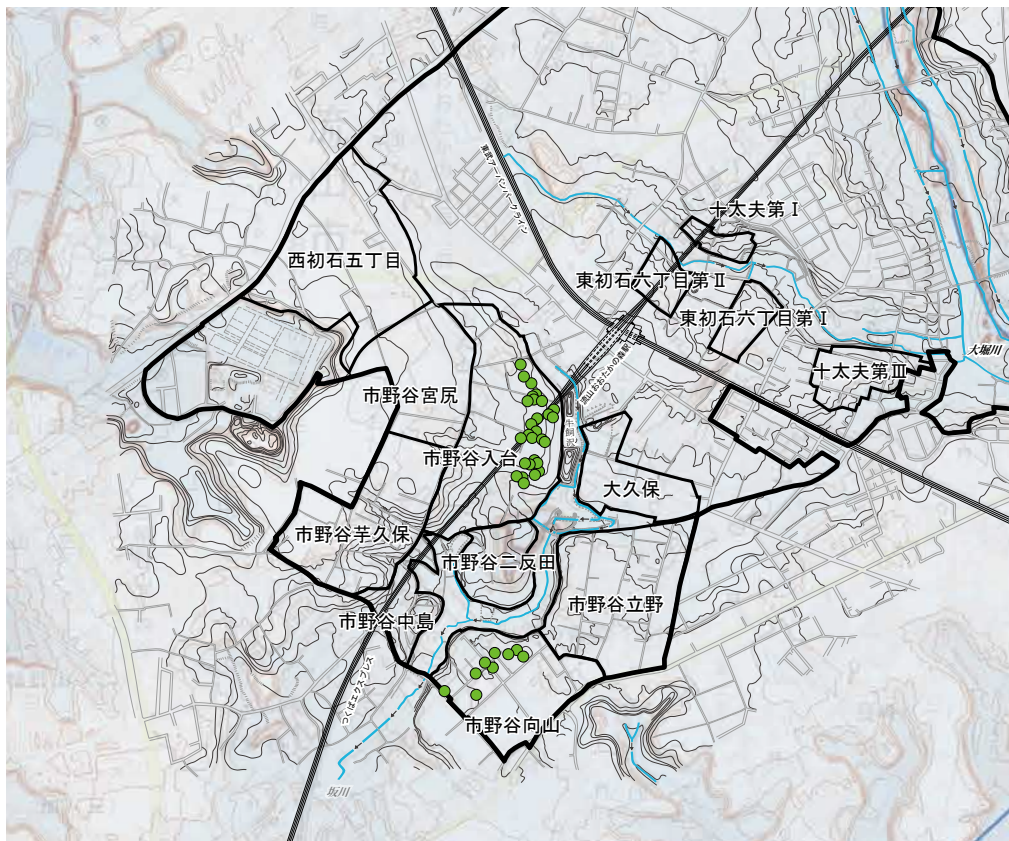


図2 古墳時代中期の住居跡分布

## 2 火処<sup>ひどころ</sup>の多様化

人が生活していく上で住居の中で火処（炉）は極めて重要な施設です。流山新市街地地区では、古墳時代前期から中期のまとまった集落を検出しており、カマド出現前における炉の様々な形態を見て取れます。

ここでは、火処に関連する事象を①台付甕、②炉器台、③土器片炉石の3つを取上げます。

①台付甕（図3） 弥生時代後期以降の煮沸用平底の甕に脚台を取り付けることによって、炉の火床からの炎を甕下胴部で効率よく受け止める工夫をしたものです。容量によって大・小に分けられます。台付甕は弥生時代中期に伊勢湾地方で出現しました。弥生時代後期以降、東日本に広く採用されるようになります。

②炉器台（図4） 竪穴建物跡の炉に、3個一組で平底の甕を載せ支える「五徳」的用途として使用されたものと考えられている器種です。炉器台は、千葉県では東京湾岸で多く出土しており、また印旛沼周辺・霞ヶ浦周辺地域にも集中して出土しています。

③土器片炉石（図5） 市野谷宮尻遺跡からは、炉の入り口側に土器片が立て掛けられている事例がいくつか散見されます。千葉県においては、土器片を利用していますが、関東他地域においては、石を利用していることが多く、「炉石」と呼んでいます。

この「炉石」の用途については、「燃烧材の空気調整」であったと想定されています。「炉石」による隙間によって燃焼による空気の調整をしていたものと考えられています。

宮尻 I 期SI085・088、II 期SI013・034・046・065・078・080、III 期SI011・027・038・081、IV 期SI012と合計13軒から検出しています（図6）。なお、今回の展示においては、土器片を利用していることから「土器片炉石」とします。

流山新市街地地区では、カマド出現前における火処の様々な形態が残されていました。このように多様な火処の背景には、多様な出自の人で構成される社会であった可能性が指摘できます。



図3 台付甕

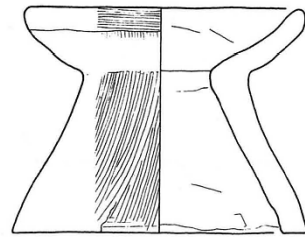


図4 炉器台



土器片炉石

図5 土器片炉石使用想定図

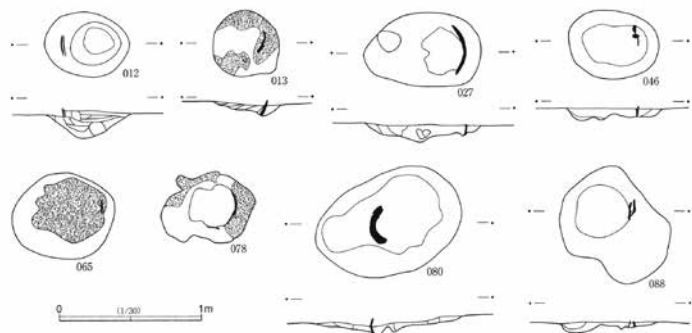


図6 土器片炉石集成

### 3 屋外祭祀と屋内祭祀

#### (1) 屋外祭祀

群馬県渋川市黒井峯遺跡（図7）は、6世紀に噴火した榛名山の爆発による火山灰・軽石等の噴出物で覆われています。そのため、当時のムラの姿がパックされており、日本のポンペイと言われています。集落の様相は竪穴住居を中心として、平地建物（作業小屋）や家畜小屋とともに畑といった現在の農村に通じる村落風景を呈しており、屋敷地内や道路脇、樹木下、などに土器や祭祀遺物が集積された祭祀跡が複数見つかっています。

市野谷宮尻遺跡からは、手捏土器を多量に使用した祭祀遺構と思われる土器集中地点が検出されています。残念ながら遺物の分布図や記録写真等がないため詳細は不明ですが、調査区北西側の住居と住居の空閑地に集積しています。右の想像図（図8）のように、住居と住居を結ぶ道路脇の祭祀場でムラの祭祀を執り行っていたのでしょう。先ほど紹介した黒井峯遺跡でも、道路脇や住居間にある祭祀場で屋外祭祀が執り行われていたと想定されます。市野谷宮尻遺跡は壺・甕・甑こしき・甗てづねとともに手捏土器主体です。古墳時代前期の屋外祭祀はほとんど類例がありません。重要な一例といえるでしょう。

#### (2) 屋内祭祀（図9）

発見される屋内祭祀の多くは、住居廃絶に伴う場合が多くを占めています。市野谷宮尻遺跡においては、屋外祭祀と同様に手捏土器やミニチュア土器を主体として祭祀を執り行っていたことが判明しています。手捏土器やミニチュア土器以外の祭祀関連遺物については以下の物があります。

重圈文鏡じゅうけんもんきょう…西初石五丁目遺跡からは小型仿製鏡の重圈文鏡がSI007から出土しています。報告書では、「素文鏡そもんきょう」として報告していますが、内区内に圈線が認められ、段を持つことから、重圈文鏡に分類されます。

土玉…直径3cmほどの球状の真ん中が貫通している土製品です。炉やカマド内やその周辺あるいは住居隅から多く出土します。  
土製勾玉…土製の勾玉です。土を捏ねて、勾玉状に成形し焼成したものです。



図7 黒井峯遺跡復元



図8 市野谷宮尻遺跡屋外祭祀 想像図



図9 重圈文鏡、土玉、土製勾玉（左から）

## 4 石製模造品

石製模造品は、古墳時代中期から後期にかけての古墳や祭祀遺構から見つかります。古墳時代中期前半は鉄製農耕具の斧、刀子、鑿、鎌が模造され、中期中頃になると勾玉、鏡、白玉などの服飾具や、剣などの武器類、機織具、酒造具が加わります。初めは比較的大型で実物を基にして精巧に作られ、少量が生産されますが、その後は小型で作りが粗雑となり、大量生産されます。

市野谷入台遺跡では、18軒の竪穴住居跡から剣形品・有孔円板等が見つっています。このうち比較的出土点数の多い4軒が工房跡と考えられます。下総西部地域の工房跡の中では、その開始時期が古い段階にある点で重要な遺跡です。竪穴住居跡から見つかる石製模造品は、古墳や祭祀遺構からみつかると異なる目的で祭祀に用いられたと考えられており、小規模なムラの単位または日常の農耕儀礼に関わる祈りに用いられていたと考えられています。

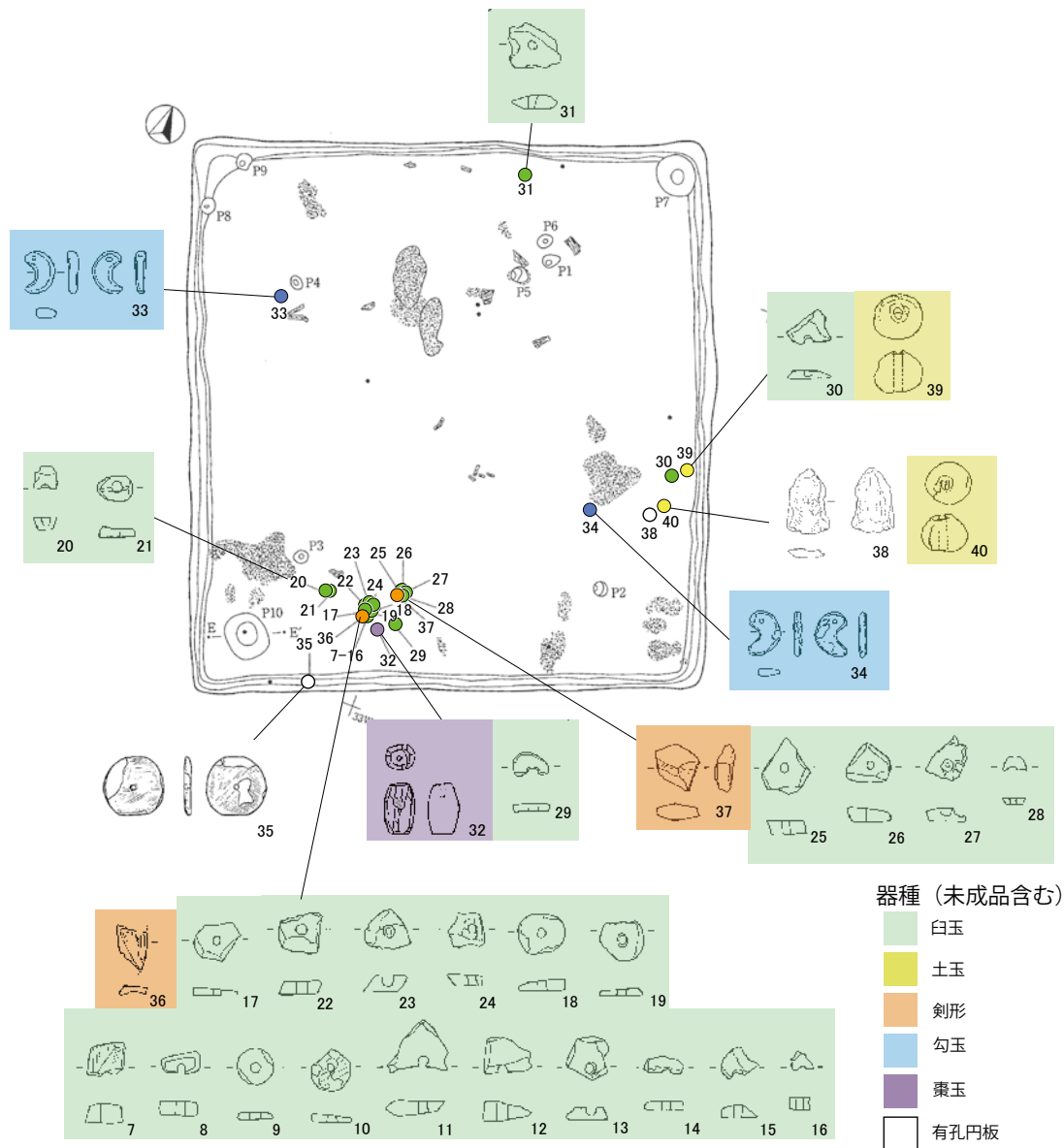


図10 市野谷入台遺跡SI021

## 5 製作工程復元

工房跡と思われる市野谷入台遺跡SI021（図10）から出土した石製模造品及び未成品・剥片から製作工程の一部を復元してみましょう。

- ①石材と母岩…滑石が大部分で、メノウや凝灰岩、蛇紋岩は少ない。メノウは製品のみです。
- ②荒割…母岩の面を替えながら節理に沿って剥離を行い、扁平素材を作り出します。素材の痕跡から金属製工具を使用していることが想定されています。
- ③形割～穿孔…扁平素材から研磨を施す前段階。白玉の未成品は三角形や四角形など不揃いで規画化されていません。棒錘により穿孔されます。
- ⑥仕上げ研磨…軽石や凝灰岩製筋砥石による、仕上げ研磨がされて完成です。

工房跡の作業場所は、図11の想像図のように竪穴住居跡の南側の入り口側に集中しています。細かい作業を行うために外光を確保する必要から、南側で作業をしていたと想定されます。



図11 石製模造品製作 想像図

### おわりに

このように、流山新市街地地区の古墳時代は、前期から中期前半の限られた時期にのみ集落が展開していました。前期の台付甕の多用や炉器台・土器片炉石といった多様な火処の背景には、多様な出自の人で構成される社会であった可能性が指摘できます。そのことは、東海系や北陸系といった外来系土器が出土していることからもうかがえます。中期になると前期の集落とは異なる場所に集落が展開しており、前期とは異なる集団の可能性もあります。中期の集落には石製模造品の工房も検出しており、今回その製作工程の一端を復元しました。このように遺跡に残されている遺構・遺物から先人の足跡をたどることができました。

### 参考文献

- 脇山佳奈「重圈文鏡の画期と意義」『広島大学大学院文学研究科 広島大学考古学研究室紀要』第7号 2015 p.p.13-37  
白井久美子ほか『研究紀要27 古墳時代中期の房総－中期的要素の波及とその評価－』財団法人千葉県教育振興財団 2012  
合田芳正「炉址小考－南関東地方弥生時代の炉を中心に－」『青山考古』第6号 青山考古学会 1988 p.p.2-12  
鶴見貞雄「炉石住居覚書－茨城県の弥生・古墳時代住居例から－」『研究ノート』第5号 財団法人茨城県教育財団 1995 p.p.103-124  
神林幸太郎「古墳時代の東北における炉の様相－石・粘土・土器を用いる構造を中心として－」『福島考古』第61号 福島県考古学会 2019 p.p.43-62

### 図版出典

- 図1・2 財団作成  
図3・9 財団撮影  
図4・6 千葉県教育振興財団2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1』千葉県教育振興財団調査報告書第545集より転載  
図5・8・11 當眞作成  
図7 若狭徹2013『シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊04 ビジュアル版古墳時代ガイドブック』新泉社より転載  
図10 千葉県教育振興財団2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3』千葉県教育振興財団調査報告書第606集より加筆編集



# 房総の<sup>せきせいも ぞうひん</sup>石製模造品について

石井友菜(千葉県立中央博物館大多喜城分館)

## はじめに

石製模造品とは、滑石片岩・緑泥片岩・蛇紋岩などの石材（以下、本稿では滑石と総称）を用いて器物をかたどったものを指します。一口に石製模造品といってもさまざまな種類があり、古墳の埋葬施設には刀子、斧、鎌などの農工具を模したものが多く納められ、集落からは有孔円板、剣形といった器種や、白玉、勾玉などが多く出土する傾向にあります（図1）。これらは当時の倭王権のもとで創出されたといわれ、古墳時代中期に最も盛行し、当該期を特徴づける考古資料の一つといえます。

石製模造品は列島各地で発見されていますが、とくに畿内と関東で多く見つかっています。中でも房総は出土遺跡数の多い地域です。さらに房総は、他地域ではあまり見られない特殊な製品も見つかっており、滑石を用いた特徴的な文化が成立した地と言えます。房総の古墳文化を探る上で、これらの滑石製の器物がなぜ、どのようにして展開したのかが重要な鍵となっています。

また遺跡からは、滑石の原石や剥片、製作途中の未成品、失敗品、砥石や穿孔具などの製作用の道具が出土し、石製模造品をつくった痕跡が残された、いわゆる「工房」が見つかることがあります。全国的

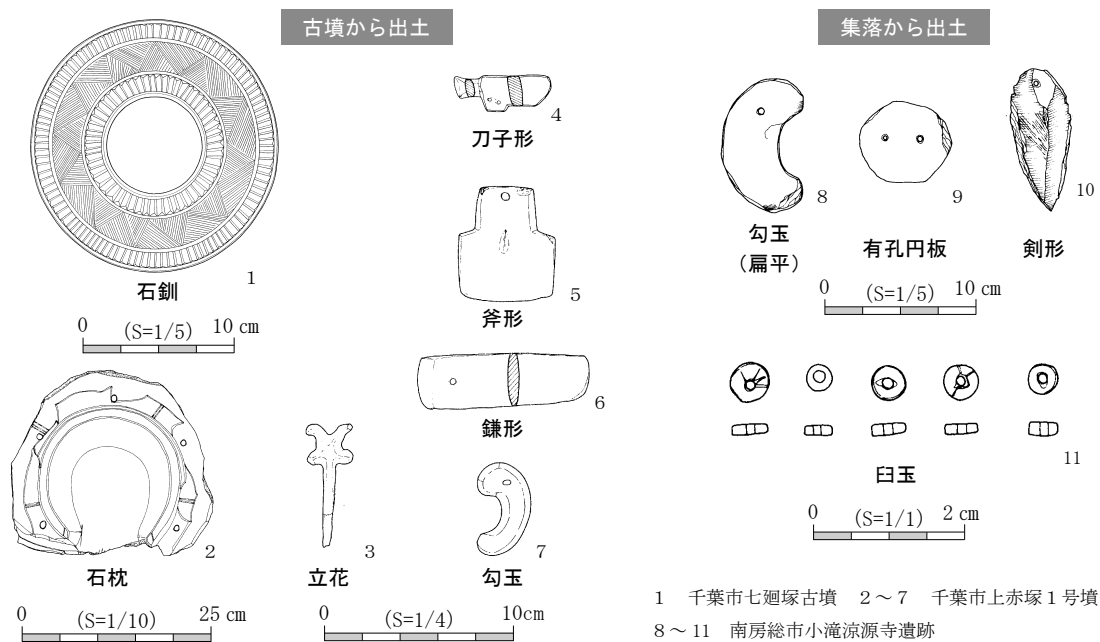


図1 房総の遺跡から出土する滑石製の器物

な集成(第54回埋蔵文化財研究集會事務局編2005、米田2019など)を参照すると、このような工房址をもつ石製模造品製作遺跡は、房総で最も多く発見されていることが分かります。今回の展示で紹介されている流山市市野谷入台遺跡も、そうした製作遺跡の一つです。

本稿では、房総の石製模造品の動向を概観し、市野谷入台遺跡がどのような遺跡であったのかについて考えます。

## 1 房総の石製模造品 一製作遺跡一

図2には、石製模造品を製作したと考えられる遺跡の分布を示しています。これを見てもわかる通り、製作遺跡が集中する地域が複数みられ、遺跡が立地する河川をもとに8つのエリアに分けられています(千葉県教育委員会1986、千葉県文化財センター1992、小林1995など)。その後、発掘調査の進展によって房総北西部での発見例が増えてきています。また常陸南部でも製作遺跡が多く見つかっており、常総の境界に存在した巨大な内海、「香取海」の沿岸に広く展開する点が注目されます。

次に、製作遺跡の年代です。早い時期の製作の痕跡は、多古町多古台遺跡群、成田市大竹玉作遺跡などで確認されています(加藤ほか2012、寺村ほか1978)。緑色凝灰岩を使って勾玉や管玉をつくるのと同時に、滑石製品の製作が少量行われていたようです。その後、滑石だけを使って石製模造品をつくる工房が出現し、5世紀代を通じて房総各地で製作が行われます。ほとんどの遺跡では5世紀の終わりから6世紀の前半頃に製作を終えますが、一部の遺跡では6世紀以降も製作を続けていたようです(稲葉2003)。

さらに、石製模造品をつくる工房とはどのような構造なのか、いくつかの例をあげて考えてみます(図3)。成田市大竹玉作遺跡では工房の南西隅に工作用ピットが設けられ、その周囲が間仕切り溝で区切られています。緑色凝灰岩や滑石の剥片などもこの周辺から多く出土しており、製作のための空間だったと考えられます。成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡も、間仕切り溝で区切られた空間のうち北東隅に最も製作関連遺物が集中し、やはりこのスペースで主に製作を行っていたと考えられます。木更津市マミヤク遺跡では、工房址が歪な形をしており、日常的に生活を送っていた痕跡が乏しいことから、製作のために短期間だけ操業されたと考えられています。一方、八千代市権現後遺跡は非常に多くの製作関連遺物が出土していますが、工房址には製作のための特別な施設は設けられていないようです。多古町多古台遺跡No.3地点でも同様に工作用ピットなどは検出されていません。また船橋市八栄北遺跡では工房址の中にカマドがあり、日常生活を送るのと同じ、通常の構造の住居で石製模造品をつくっていたようです。このように工房址といっても、石製模造品をつくるための設備を設けた特別なものから、通常の住居と変わらないものまで多様なあり方を示しています。その理由は明確には分かりませんが、石製模造品をつくる目的、頻度、あるいは求められた製品の量や器種の違いなどによって、必要となる設備もさまざまであったのかもしれませんが。

また、石製模造品をつくるためには素材である滑石を入手する必要がありますが、房総では南部の嶺岡山地を除いて、有力な石材産出地がないという特徴を持っています。石材の入手先は群馬・埼玉県境の三波川変成帯か、茨城県北部の日立変成帯が候補となります。いずれにせよ、最も遺跡数の多い房総北部周辺には産出地がなく、遠くから工房へ石材を運び込み、製作していたと考えられます。

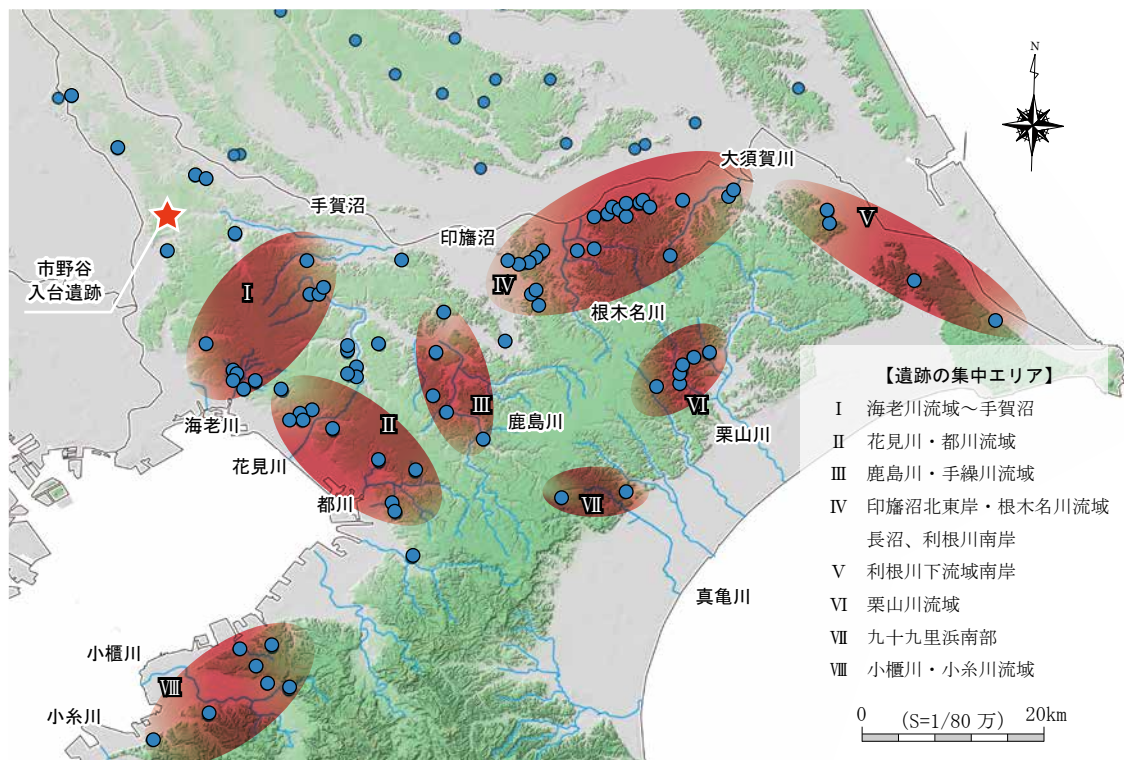


図2 房総の石製模造品製作遺跡の分布  
(青い点が石製模造品製作遺跡、赤い星マークが市野谷入台遺跡の位置)

## 2 房総の石製模造品 一古墳・祭祀遺跡・集落一

上記のような遺跡で製作された石製模造品は、古墳や集落、祭祀遺跡などに運び出され、葬送や祭祀で使用されたと考えられます。

古墳では、多古町多古台No.8-6号墳、香取市一之分目古墳などで最も早い時期の石製模造品が見つかっています。とくに刀子形は茨城県常陸鏡塚古墳、三重県石山古墳のものと形や大きさがよく似ており(田中2008、清喜2010)、倭王権や各地の首長層との政治的なつながりの中で、房総に石製模造品がもたらされたと考えられます。これらは精巧で立体的なつくりをしています。時期が降ると神崎町北の内古墳のように小型化・粗雑化したものも出てきます。また房総では石枕や立花と呼ばれる特殊な器物が多く存在することが知られています。石製模造品と石枕・立花の間では石材が共通するものもみられ、両者の製作環境を考える上で重要です。時期や分布・年代も、石製模造品製作遺跡とほぼ共通しています。

ただ、古墳に納められた滑石製の器物の中でも、農工具形の石製模造品や石枕・立花が先述のような工房址から見つかることはほとんどありません。房総では刀子形の未成品が出土した船橋市宮本台遺跡、刀子形が採集された成田市大和田玉作遺跡群、立花が出土した玉造上ノ台遺跡など数遺跡に限られ、近隣地域を見渡しても、やはりごく限られた例しかないようです(志村2019、山田2019、佐久間2009)。この理由としては、古墳に納める品は生産や流通が厳密に管理された結果、工房址に製作の痕跡が残ら

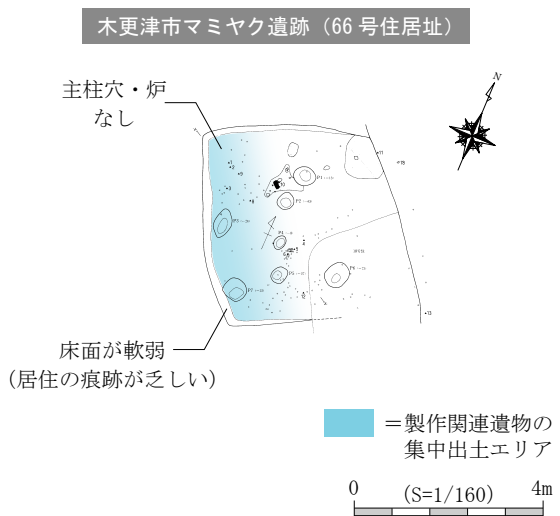
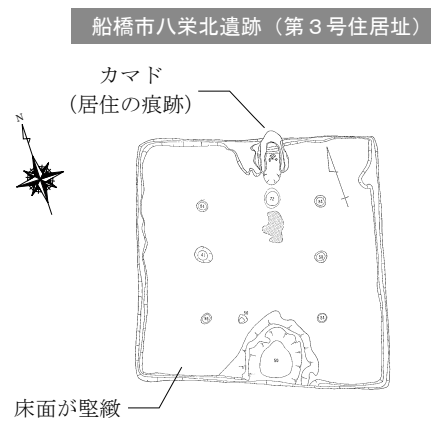
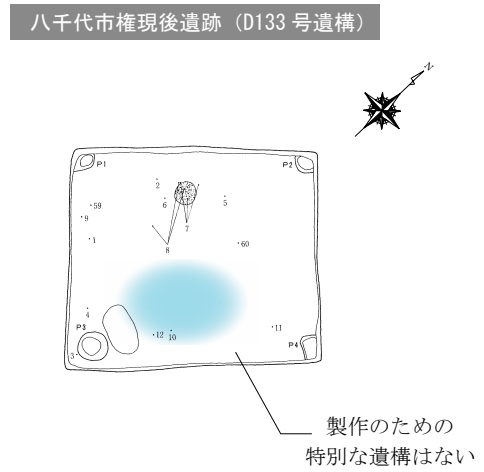
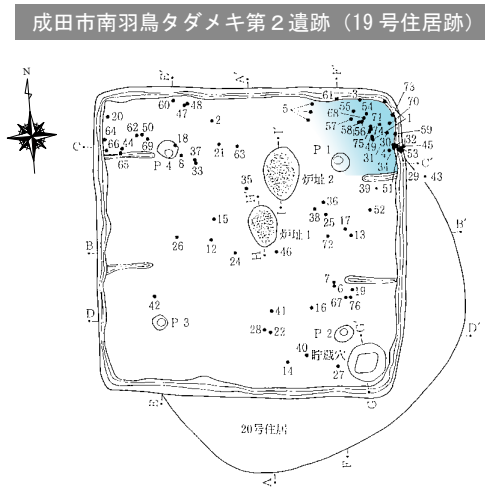
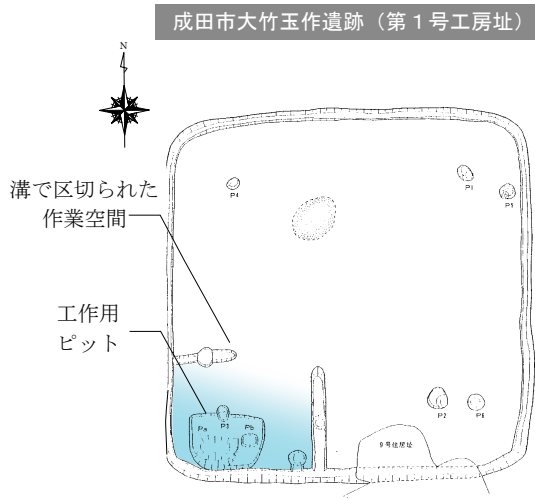


図3 石製模造品製作工房址の比較

ないという説、あるいは白玉や剣形、有孔円板などとは全く異なる特別な工房で作っているという説など、さまざまな見解が示されています。

祭祀遺跡では、早い時期のものとしては南房総市小滝涼源寺遺跡があります。木更津市千束台遺跡では、5世紀代を通じて石製模造品を用いた祭祀が執り行われていたようです。木更津市マミヤク遺跡では5世紀後半の祭祀遺構が発見されていますが、白玉だけでも2000点以上を数え、大量の石製模造品が使われたことが分かっています。集落からは香取市阿玉台北遺跡B地点、同市仲ノ台遺跡などで早い時期の確認例があり（加藤ほか2012）、5世紀代を通じて多く出土し、6世紀以降に少なくなる点は、製作遺跡や古墳の動向と一致しています。

### 3 流山市市野谷入台遺跡の特徴

以上のような房総全体の動向をふまえた上で、今回展示されている流山市市野谷入台遺跡について考えます（図4）。市野谷入台遺跡では、古墳時代の竪穴住居址35軒のうち、18軒から石製模造品が発見されています。出土したのは白玉、有孔円板、剣形、勾玉、紡錘車などで、集落から出土する品としては一般的な品目といえます。また石製模造品が出土した住居址のうち、剥片や未成品、失敗品、工具類が多く出土した4軒が工房址と推定されています。

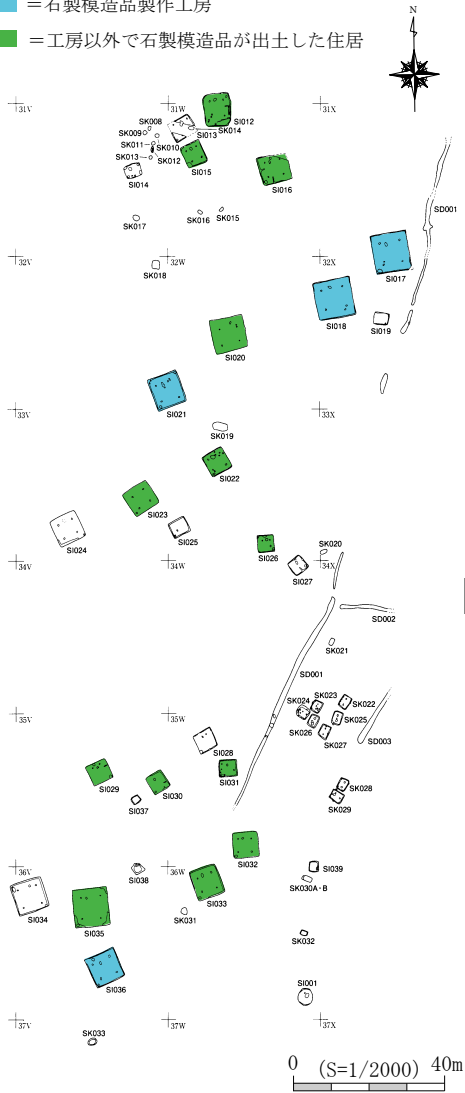
中でもSI021は製作に関連する遺物が525点と、遺跡内で最も多く出土しています。とくに白玉の未成品が多く出土していて、どのような手順でつくったかを推測することができます。具体的には、金属工具などをつかって母岩を打ち割り（荒割）、扁平な素材を得た後、目的とする製品の形状に近づけていき（形割）、研磨で素材を平らに整えた後に穿孔、最後に仕上げの研磨を行っていたようです。遺跡内では滑石の剥片や未成品、失敗品のほかに、研磨に使われたと考えられる軽石や筋砥石などの工具類が出土しています。また、土玉については祭祀具としての用途のほか、玉類に穿孔する際のはずみ車（コマ）として使用した可能性も指摘されており（寺村2001など）、これも石製模造品の製作に使われた可能性があります。

各地の石製模造品製作遺跡で白玉のつくり方が検討されていますが、市野谷入台遺跡の場合、量産を意識したというよりは、1つ1つ丁寧につくっているような印象をうけます。白玉のつくり方の研究（篠原1995など）を参照すると、側面に稜がつくり出されるものほど丁寧な製作とされていますが、SI018から出土している完成品の白玉などをみると、やはり念入りに研磨を行い、形を整えていることが分かります。またSI021の場合は、製作関連遺物が南西隅に集中しています。こうした状況からは、工房内で複数の工人が同時に作業を行っていたという形ではなく、日当たりのよい南側を作業スペースとして、1人の工人が、一連の工程を全て担う形で製作を行っていたような状況が想像されます。

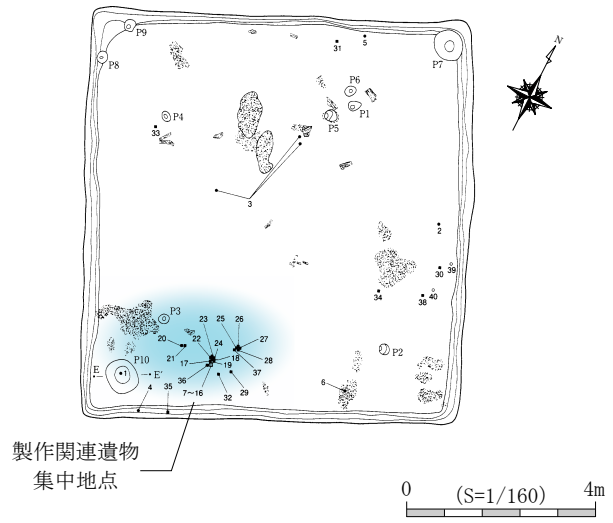
1遺跡内に4軒という工房址の数は、江戸川流域左岸では最も多く、現時点では当地域で最大規模の石製模造品製作遺跡と言えます。ただし集落内の同時期の住居址に対する工房址の割合は、成田市石塚遺跡、八千代市権現後遺跡などに比べると低いようです。また年代としては5世紀前半と、房総の石製模造品製作遺跡の中では比較的早い時期に出現し、全国的に最も製作が盛行するといわれる5世紀後半（川西2004）より前に姿を消すことが、本遺跡の大きな特徴と言えます。

市野谷入台遺跡の遺構分布図

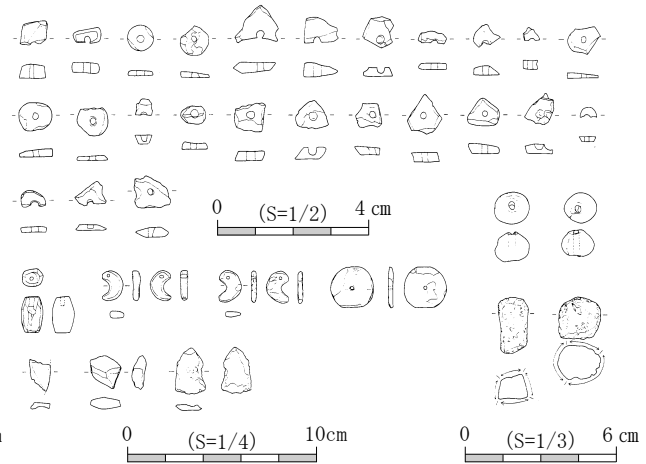
■ = 石製模造品製作工房  
 ■ = 工房以外で石製模造品が出土した住居



石製模造品製作工房址 (S1021)



出土遺物



市野谷入台遺跡の出土遺物から推測される臼玉の製作工程

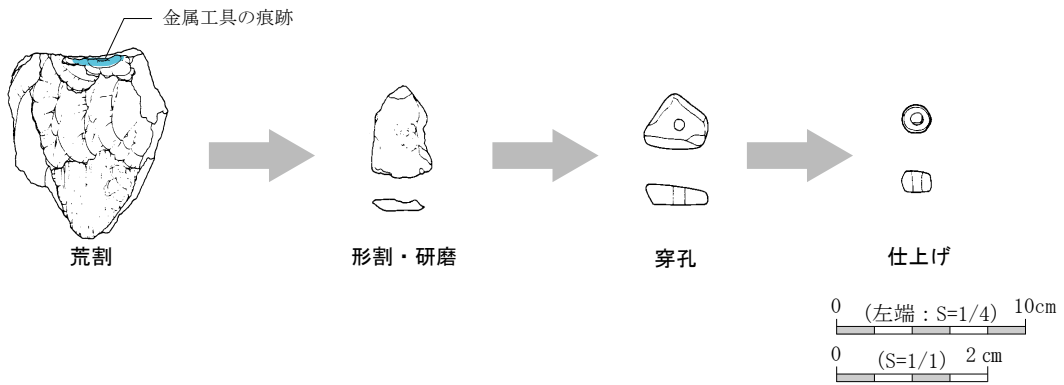


図4 市野谷入台遺跡の石製模造品製作工房址

## 4 市野谷入台遺跡で作られた石製模造品の供給先

市野谷入台遺跡でも、工房址に残された剥片や未成品などの量に比べて完成品はわずかししか見つかっていません。ここで作られた石製模造品は、集落内の祭祀で使われて廃棄されてしまったのか、あるいは運び出されてほかの集落で使われた可能性が考えられます。流山市内の集落では、前平井堀米遺跡、加村台遺跡k地点、加地区町畑遺跡j地点、加地区町畑遺跡A地点などでも石製模造品の出土がみられますが、中でも注目されるのは市野谷入台遺跡から1.1kmほどの近隣に所在する三輪野山遺跡群で、白玉、勾玉、有孔円板、剣形、紡錘車などが出土しています（流山市教育委員会2015）。白玉は丁寧な研磨によって整形されたものも含まれており、市野谷入台遺跡から供給された可能性も十分に考えられます。このように市野谷入台遺跡では、自集団内での祭祀での使用、あるいは近隣集落への供給を目的として、石製模造品を製作していたのではないかと考えられます。

## おわりに

以上、房総の石製模造品の展開を概観し、市野谷入台遺跡の性格について検討を行いました。石製模造品製作遺跡の中でも比較的早い時期に出現した市野谷入台遺跡は、房総における滑石製の器物の展開を探る上で、重要な遺跡と考えられます。

## 引用文献

- 朝夷地区教育委員会1989 『小滝涼源寺』朝夷地区教育委員会  
稲葉千絵2003「房総地域における石製模造品製作に関する一考察」『法政考古学』第30集 法政考古学会  
小澤重雄2019「茨城の玉作と石製模造品」『手工業生産と古墳時代社会』東北・関東前方後円墳研究会  
加藤修司・白井久美子・木原高弘・黒沢 崇・神野 信・大沢正己2012『古墳時代中期の房総 中期的要素の波及とその評価』研究紀要27 千葉県教育振興財団文化財センター  
川西宏幸2004『同型鏡とワカタケル : 古墳時代国家論の再構築』同成社  
君津郡市文化財センター1989 『君津郡市文化財センター発掘調査報告書44：マミヤク遺跡』君津郡市文化財センター  
小林清隆1995「房総の石製模造品製作」『研究紀要』16 千葉県文化財センター  
財団法人印旛郡市文化財センター2000 『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書156：南羽鳥遺跡群4』財団法人印旛郡市文化財センター  
財団法人香取郡市文化財センター2002 『多古台遺跡群2』財団法人香取郡市文化財センター調査報告書80  
財団法人千葉県教育振興財団2008 『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3』千葉県教育振興財団調査報告606  
財団法人千葉県文化財センター1982 『千葉東南部ニュータウン13』千葉県文化財センター調査報告57  
財団法人千葉県文化財センター1984 『千葉県文化財センター調査報告70：八千代市権現後遺跡1』住宅・都市整備公団  
財団法人千葉県文化財センター1994 『千原台ニュータウン6』千葉県文化財センター調査報告241  
佐久間正明2009「東国における石製模造品の展開」『日本考古学』27 日本考古学協会  
篠原祐一1995「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
志村 哲2019「群馬県における古墳時代の石製模造品」『手工業生産と古墳時代社会』東北・関東前方後円墳研究会  
清喜裕二2010「東日本における農工具形石製模造品出現期の様相」『比較考古学の新天地』同成社  
第54回埋蔵文化財研究集会事務局編2005『古墳時代の滑石製品』埋蔵文化財研究集会  
田中大輔2008「倭王権と石製模造品」『國學院雑誌』109-11  
千葉県教育委員会1986『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』  
千葉県文化財センター1992『研究紀要13 生産遺跡の研究2 玉』  
寺村光晴・千家和比古・安藤文一1978「成田市大竹玉作遺跡調査概報」『成田史談』第23号 成田市文化財保護協会  
寺村光晴2001「玉作」『ものづくりの考古学』大田区立郷土博物館  
流山市教育委員会2015 『流山市埋蔵文化財調査報告55：流山市三輪野山遺跡群』流山市教育委員会  
八栄北遺跡調査団1972 『八栄北遺跡』船橋市教育委員会社会教育課  
山口典子2004「(6) 玉類の生産」『千葉県の歴史』資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)

山田琴子2019「手工業生産からみた埼玉県の古墳時代」『手工業生産と古墳時代社会』東北・関東前方後円墳研究会  
米田克彦2019「古墳時代玉作遺跡の分布と変遷」『古墳時代の玉類の研究』鳥根県古代文化センター研究論集第21集  
鳥根県古代文化センター

#### 図版出典

- 図1 財団法人千葉県文化財センター1982 p.17 第7図、p.19 第8図、p.23 第9図、p.25 第11図、p.31 第14図、  
財団法人千葉県文化財センター1994 p.751 図614、朝夷地区教育委員会1989 p.66 第37図、p.67 第38図を改  
変して作成。
- 図2 国土地理院基盤地図情報数値標高モデル（5mメッシュ）、地理院タイル陰影起伏図、国土数値情報河川データ  
を利用し、QGISを用いて作成。石製模造品製作遺跡については、千葉県文化財センター1992、小林1995、稲葉  
2003、山口2004、第54回埋蔵文化財研究集会事務局編2005、米田2019、小澤2019などを参照し、近年の発掘調査  
事例を加えて集成。
- 図3 寺村・千家・安藤1978 p.12 第1図、財団法人香取郡市文化財センター2002 図版9、財団法人印旛郡市文化  
財センター2000 p.308 第215図、財団法人千葉県文化財センター1984 p.427 図481、八栄北遺跡調査団1972  
p.14 第9図、君津郡市文化財センター1989 p.292を改変して作成。
- 図4 財団法人千葉県教育振興財団2008 p.10 第6図、p.184 第124図、p.189 第127図、p.190 第128図を改変して  
筆者作成。



---

令和5年度出土遺物公開事業  
流山新市街地地区の遺跡展  
—大地より出でし先人の足跡—  
講演会発表要旨

発行日 令和5年9月2日  
編集・発行 (公財)千葉県教育振興財団  
〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2  
TEL. 043-422-8811(代)  
印刷 株式会社エリート情報社[印刷出版局]

---



公益財団法人  
千葉県教育振興財団

